

化学療法・免疫抑制療法の際の B 型肝炎治療について

[_____]さま

【現在の状態】

- あなたはこの度[_____]と診断され、治療を始めるところです。
- 実は事前に調べた採血では、あなたの体の中には B 型肝炎ウイルスが体内に入ったことのある痕跡があるようです(抗体陽性)。
- ウイルスは{1:多少なりと肝臓の中で増殖しており、血液の中のウイルスも陽性です。2:現在ほとんど増殖がなく、血液の中では検出されませんが、肝内に潜んでいます}
- 少なくとも今回の病気を除外して、B 型肝炎だけで考えれば、今のあなたに対して B 型肝炎の治療を行う必要はないと思われれます。
- しかし、今回のあなたの病気に対する治療には、あなたの体の免疫を弱める薬剤を使用します(免疫が弱る程度にはかなり個人差があります)。そのことによりウイルスと免疫力との間の力関係が変化し、結果的に B 型肝炎ウイルスが再活性化する可能性があります。近年強力な化学療法がでてきており、再燃した B 型肝炎で死亡する患者さんもおられます。
- バラクルードという抗ウイルス剤は確実にウイルスを抑え、なおかつ副作用はほとんどありません。一方飲まずに肝炎が再燃し、劇症化した際には高率な死亡が懸念されます。
- これらのことを踏まえると、免疫抑制療法・化学療法を行う際、B 型肝炎が現在鎮静化していても、血中のウイルスが陽性であればバラクルードという抗ウイルス作用のある内服薬を開始することがガイドラインで定められています。また、治療を続ける過程でウイルスが陽性化すれば、その時点でただちにバラクルードを開始することが推奨されます。
- デメリットはバラクルード内服の金銭負担です。肝炎の状態によっては公費助成制度の適用になりますが、公費助成の対象に入らないこともしばしばあります。化学療法の多くは高額療養にあたるので、バラクルード分の上乗せしても自己負担額が変化しないことも多いです。ケース・バイ・ケースの判断となります。

上記内容を説明しました。

平成 _____ 年 _____ 月 _____ 日 _____ 科
